

重複語の有契性：言語類型論の視点から*

宮川 創†

京都大学大学院文学研究科

1 はじめに

1.1 完全重複と部分重複

アメリカ構造主義言語学者 Edward Sapir が “nothing is more natural than the prevalence of reduplication” (Sapir 1921: 76) とまで述べるように、重複は世界中の言語で数多く観察される言語現象である。重複は、同じ語を繰り返す統語的装置の反復¹とは異なり、形態論の内部で行われる、語構成法の一つである。具体的には、語もしくは形態素の全体、または一部を繰り返し、新たな語を形成させる手法である。この際、大抵の場合、語基の意味に何らかの意味を加える。重複が操作的に実行され、形成された語を重複語と呼ぶ。重複語は、Rubino (2011), Inkelas and Zoll (2005) がその区別を行なっているように完全重複語 (full reduplication) と部分重複語 (partial reduplication) の二形式に類型化される²。前者は、ヤミ語の *tao~tao*³ ‘people’ (Rau and Dong 2005: 61) のように語基全体を繰り返し、後者はサンスクリット語の *dá~dāti* ‘goes’ (Kulikov 2005: 431) のように語基の一部分を繰り返して、語形成するものである。完全重複とは異なり、部分重複には、繰り返す部分の長さや前後どちらの方向に繰り返すかによって、様々な形式がある。(Moravcsik 1978: 305-311)

重複の意味・機能を論じる上で、この完全重複と部分重複の形式上の違いはどのように扱えばよいであろうか。Bybee (2001) の Usage-Based な音韻論によれば、使用頻度 (frequency) の高い語形は通時的に短くなるという。World Atlas of Language Structures の Chapter 27 ‘Reduplication’ (Rubino 2011) では、「部分重複のみを持つ言語」は確認されていない。本稿は、Bybee (2001) と Rubino (2011) から完全重複は部分重複よりもより根源的であり、部分重複は、基本は、完全重複が簡略化され通時的に定着化し、スキーマ化した形式だと捉える。完全重複をより根源的であるとする捉え方は、Steriade (1988) や Inkelas and Zoll (2005) など、近年の形式文法的な形態音韻理論での、完全重複を基底形、もしくは入力にたて、そこから clipping を経て部分重複が派生されたとする考え方とマッチする。しかしながら、Steriade (1988) や Inkelas and Zoll (2005) らは、共時態のみで考えているのに対し、本稿は通時態を中心に考えているところに違いがある。

1.2 文法的重複とオノマトペ的重複

重複語は、意味・機能的に文法的重複語とオノマトペ的重複に二分できる。van Huyssteen (2004: 2) もこの区分を彼のアフリカンス語の重複の分析の前提としている。文法的重複語は、シュメール語の *dumu~dumu* ‘children’ < *dumu* ‘child’ (Jagersma 2010: 115) のように、明確な語基 (ここでは *dumu*) があり、その語基に重複という形態論的操作が加えられたことで、語基の意味に追加的な意味 (ここでは複数性) が

体系的に加えられた語である。

これに対して、オノマトペ的重複は、世界中の擬音語もしくは擬態語に広く見られる重複現象である。オノマトペ的重複の場合、文法的重複よりも、描写性・場面性が強いと言える。つまり、文法的重複の場合は、確固とした形式のスキーマとそれに対応する意味・機能があり、形式はアド・ホックに変更・修正することは出来ないが、オノマトペ的重複は、その場面をより如実に描写するために、繰り返しを増やしたり、促音などの音要素を追加させたりすることが可能である。また、オノマトペ的重複の場合、文法的重複よりも、その語基の語彙性が弱いということが言える。もちろん、オノマトペ的重複の中には、筆者の研究しているコプト・エジプト語の *skrkr*-⁴‘roll’ のように完全に語彙化され、オノマトペ性を失い化石化した語も存在するがこれは周縁的な例である。本稿は、このうち、文法的重複に焦点を当て、議論する。

2 Graz Database on Reduplication における調査

Graz Database on Reduplication ⁵(以下、GDR と略) は、グラーツ大学言語学研究所によって開発された、言語類型論に根ざした重複語のデータベースであり、82 言語の重複語が収録されている。大陸・地域別では、Africa : Australia and New Guinea : Eurasia : North America : SE Asia and Oceania : South America = 13 : 15 : 16 : 7 : 24 : 7 であり、地域的な極端な偏りはなかった。本稿は、GDR における SQL Visual Query Builder の Reduplication Function の field にある 6 カテゴリーを調べた。その 6 カテゴリーは、それぞれ、1. diminution, 2. intensification, 3. lexical enrichment, 4. other, 5. pluralization, 6. word class derivation である⁶。このうち、lexical enrichment は、フィジー語 (Fijian) の *wai-wai* ‘oil’ < *wai* ‘water’ (GDR) など重複語と語基との意味上の結びつきが明確でないものの集合である。この中には、モキル語 (Mokilese) の *korō-ro* ‘white’ < **korō* (GDR) など、語基がもはや使われなくなったものも入る。これらは、diminution, intensification, pluralization, word class derivation などの文法的重複から、脱文法化によってその形式がレキシコンに組み込まれ、かつ語基が不明確になったものであると考えられる。ここで lexical enrichment の重複語の分類における位置を示すと表 1 のようになる。

	語基が語彙として確立している	語基が語彙として確立していない
語基との意味的な繋がりが強い	文法的重複語	オノマトペ的重複語
語基と意味的な繋がりが弱い	lexical enrichment	

表 1: 重複語のカテゴリー

一方、文法的重複の中では、4. の other は大きな集合となりえなかった雑多な諸機能の寄せ集めであるため本稿では扱わない。6. の word class derivation も、ヤキ語 (Yaqui) の *chu~chuu*[?]*u* ‘have/use dog(s)’ < *chuu*[?]*u* ‘dog’ (GDR) のように、品詞カテゴリーを変えるもので有契性を見いだせないため、扱わない。よって、本稿では、残りの pluralization, intensification, diminution を扱う。intensification は、増大や強調などが含まれ、diminution には、縮小や愛称化などが含まれるなど先行研究と特に異なる点はないが、pluralization だけは、GDR においては先行研究よりも広義に捉えられている。GDR における pluralization は、かなり包括的な「複数化」である。もちろん単純な plural が多いが、many などのニュアンスが入った plurality, 分散性や、動作の複数性、動作の参加者の複数性、更には反復相、習慣相、進行相、未完結相も含まれる。これらが 1 つのカテゴリーで包括されていることは、このデータベースの作者が、これらの諸意味は 1 カテゴリーとして捉えられると考えたからであろう。概念の複数性には、モノの複数も動作の複数も含まれる。モ

ノの複数は、分散性に意味拡張したと考えられる。一方、動作の複数は反復相に、反復相は進行相に進行相は未完結相にシネクドキによる意味的拡張が考えられる。

3 集計結果

GDR において調査し集計した言語数は 82 であった。これらは全て、重複を持っている言語である。それらの中には、pluralization, intensification, diminution, word class derivation, lexical enrichment, other の 6 つ全ての重複を持っているタガログ語 (Tagalog) やアイヌ語 (Ainu) のような言語もあれば、このうちの 1 種類の重複しかもっていないペルシア語 (Farsi) のような言語も含まれている。集計結果は、多いものから順に、pluralization の重複を持つ言語が 82 言語のうち 87%, lexical enrichment が 67%, intensification が 54%, word class derivation が 40%, diminution が 39%, other が 27% であった。このように、いくつかの特定の機能に集約することから、重複の意味と形は恣意的な関係でないことは明らかであり、何らかの性質によって動機付けられていると考えられる。その動機付けの原因について、はじめに考えられるのは類像性である。類像性とは、形と意味とが類似によって深く結びついている性質のことである。認知言語学もしくは機能主義言語学では、Croft (2003: 103) の”the intuition behind iconicity is that the structure of language reflects in some way the structure of experience”という言葉にあるように、類像性の背後にある直感、言語の構造が経験の構造を反映することであると言われている。この結果からわかるように、pluralization の重複をもつ言語が圧倒的に多かった。pluralization の重複は、形が複数になると意味が複数になるだろうという人間の経験的な洞察から、言語知識がなくてもその意味を類推しやすい⁷。よって、pluralization の重複は、明らかに類像性が高いといえよう。pluralization の重複は、類像性をもつ言語形式のなかでも、極めて primitive なものであると言える。更に、pluralization の重複には、この形と意味の複数性による類像性のほかに、Haspelmath (2008: 1) がまとめた ‘three subtypes of (diagrammatical) iconicity’ のうちの iconicity of quantity の類像性さえ備わっている。この類像性は、「形式が増大すれば意味も増大する」ということであり、Lakoff and Johnson (1980: 127) の MORE FORM IS MORE CONTENT のメタファーが捉えるところのものである。これら 2 つの類像性から、pluralization は、文法的重複の諸機能の中では最高度に類像性が高い言語形式だと言うことが出来る。よって、類像性による形から意味への圧倒的な類推のしやすさと、図 1 で示されたそれを有する言語の割合の圧倒的な高さから、pluralization の重複は文法的重複のプロトタイプだと考えることができる。本稿は、このプロトタイプから intensification と diminution の諸機能のネットワークを考える。最初に、intensification であるが、pluralization と intensification は量の増加から、程度の増加にマッピングされたものとして、その有縁性が考えられる。これは iconicity of quantity に適っている。しかしながら、diminution は、iconicity of quantity に反しており、それがどのように動機づけられているのかが考えるのが難しい。そこで、認知言語学の文脈における先行研究を参照しながら、diminution の有契性について考察する。

4 縮小の重複に対する検討

認知意味論においては、その初期から、Lakoff and Johnson (1980) が重複についての一定の説明をしている。かれらによれば、重複は全て MORE FORM IS MORE CONTENT (Lakoff and Johnson 1980: 127) というメタファーによって、動機づけられているという。この説明はたしかにシンプルであり、縮小以外の重複では適用可能である。しかし、縮小の重複の動機づけをもこのメタファーで説明する点に関して彼らは誤ってい

る。なぜなら、DIMINUTION はあきらかに LESS CONTENT であるのにもかかわらず、彼らはそれを MORE CONTENT であると捉えているからだ。では、どうして、彼らが縮小を MORE CONTENT だとしたか、という点に関しては、彼らの誤った理解が原因にある。その理解とは、「小さいものを意味する語に適用された重複は縮小を示す」“Reduplication applied to a word for something small indicates diminution”(Lakoff and Johnson 1980: 128) と彼らが見なしていることである。この理解が誤っていることは現代ヘブライ語 (Modern Hebrew) の *klav-lav* ‘puppy’ <*kelev* ‘dog’ (GDR) やタガログ語 (Tagalog) の *ma-ga~ganda* ‘rather beautiful’ <*ma-ganda* ‘beautiful’ (GDR) などの例で明らかである。よって、彼らのように縮小の重複が MORE FORM IS MORE CONTENT というメタファーで動機づけられていると考えることは出来ない。

Lakoff and Johnson (1980) とは異なって、Regier (1998) は、縮小の重複は、BABY という意味から意味変化したものであると言っている (Regier 1998: 888)。彼によれば、BABY というカテゴリーは、文字通り、幼児を指すものである。彼らは、幼児の発する喃語に着目し、喃語では通言語的に重複語が多いことを指摘し、それを根拠に、喃語は BABY から来ていると主張する。確かに、ここからオノマトペ的重複、あるいは lexical enrichment を動機づけさせることは可能である。しかしながら、文法的な縮小の重複を動機付けさせることは無理である。喃語には *papa* 「お父さん」、*buubuu* 「車」など、重複語が多いが、しかしながら、それらは、文法的な重複語とはいえず、音韻的、もしくは完全に語彙化された重複語である。⁸そのために、形態論的な操作が加わる前の語基を探そうとしても、喃語では、語基の形態素を特定しづらく、語基の語彙性が比較的明確である文法的重複語とは性質を異にしている。このように、BABY から DIMINUTION が意味拡張したという説は、アド・ホックであり、より強固な根拠が必要である。同様に、Fischer (2011: 67) も Regier (1998) と同じく BABY から DIMINUTION への意味拡張を認めている。しかしながら、一方で、彼女は水平方向の広がりからの DIMINUTION への意味拡張という、別の観点をも想定している。このことに関する彼女の説明は少なく、詳細な説明が待たれる。

一方、Nomura and Kiyomi (1993) は、DIMINUTION の意味をもつ動詞の重複は、動作の複数性により、動作が分割され、それらの個々の動作の一部がプロファイルされて、動機づけられたと主張する。彼らの議論は、動詞の重複にかぎったものであるが、動作のみではなく指示物など全てを含む意味⁹の複数化にまで一般化することも十分可能である。意味が複数化されるとき、その意味が分割されたように認識されうる。そして、それらの分割部分のうちの 1 つがプロファイルされれば、その部分の意味は、語基の意味よりも小さく認知されうる。この捉え方は、これまでみたなかで縮小の重複に関する最も最適な説明である。なぜならば、pluralization, intensification, diminution が文法的重複の枠内での意味拡張のみによって説明できるからである。よって、本稿はこの考え方を取り入れ、縮小の重複は、根源的には、プロファイルという人間の認知のありかたの一側面を通して、plurazation の重複から意味拡張されたものであると考える。

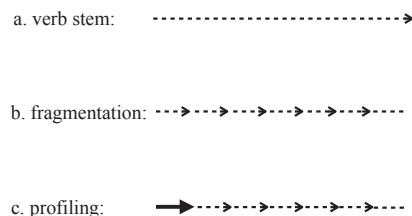


図 1: Nomura and Kiyomi (1993: 10)

5 オノマトペ的重複と文法的重複の接点

ここまで、文法的重複のみを見てきた。この節では、文法的重複とオノマトペ的重複との繋がりについて考える。オノマトペ的重複と文法的重複は、一見別々のものに見えるが、より深く考察すると、2 者の間に

強力なリンクが存在することが見えてくる。というのは、オノマトペが重複がされる場合、されない場合と比べて明らかに複数化されているように感じられるからである。例えば、擬音語の場合は、「犬がワンと吠えた」に対する「犬がワンワンと吠えた」、擬態語の場合は、「星がキラッと輝いた」に対する「星がキラキラ輝いた」では、重複語のある文は、そうでない文に比べ、その動作が複数回または、継続的に起こったことを示している。動作の複数性と継続相は GDR では pluralization の重複の範疇に入る。これらの観察から、オノマトペの重複と pluralization の重複の間にはある程度同質性が認められる。

6 結論

以上の考察をまとめると以下の図3のようになる。太線は機能的な同質性における結びつきを、矢印付き実線はマッピングによる意味拡張を、点線は脱文法化の過程を表している。全ての重複の根源は、onomatopoeic reduplication か、類像性で形から動機付けられた pluralization である。その他の機能は、プロトタイプである pluralization からシネクドキとメタファーを中心とした様々なマッピングを経て意味拡張され、脱文法化でレキシコンへ移行した重複語が化石的な重複語として lexical enrichment に移行したということをこの図3は表している。

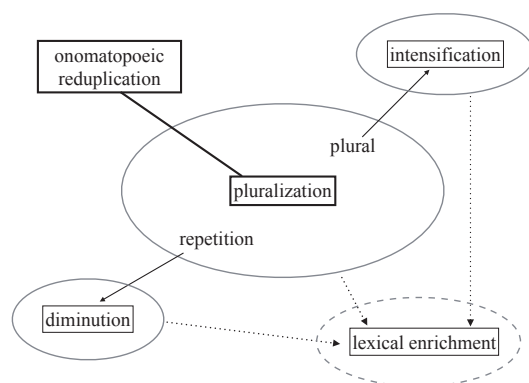


図2: 重複の意味ネットワーク

後注

*本稿を書くにあたり、Thomas Schwaiger 先生、吉田和彦先生、清海節子先生、

野村益寛先生、田窪行則先生、佐藤知己先生、長屋尚典先生、黒木邦彦先生の諸先生方、青木眞喜子氏、Tero Vattukumpu 氏、伊藤彰規氏、秋田喜美氏、木本幸憲氏、山本恭裕氏、Paul Julian Santiago 氏、仲尾周一郎氏、伊藤雄馬氏、Nguyen Thi Ha Thuy 氏の諸氏、および認知言語学会第14回大会における本稿と同名のポスター発表において有益なコメントをしてくださった方々に多大な恩恵を受けた。この場を借りて感謝を表したい。

[†]miyagawa.so.36u@st.kyoto-u.ac.jp

¹反復とは “*He is very very very tall*” (Lakoff and Johnson 1980: 127) に見られるような、語の統語論的な繰り返しのことである。Gil (2005) は、Riau Indonesia 語を例に重複と反復を判別するための言語類型論的判断基準について論じている。

²この2つは、それぞれ Sapir (1921: 76) における “Nothing is more natural than the prevalence of reduplication, in other words, the repetition of all or part of the radical element.” の後半部分の “or” の前後の部分に相当する。

³言語類型論におけるグロッシングの規範である Leipzig Glossing Rules (<http://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>, accessed on 2014-2-16) に則り、重複の基体部 (base) と重複部 (reduplicant) の境界はチルダで示した。

⁴k と r のあいだに a が入る解釈もあり得る。

⁵<http://reduplication.uni-graz.at/redup/>, accessed on 2014-2-16.

⁶Kajitani (2005: 93) は、このカテゴリーとは異なり、文法的重複の意味を Augmentation, Diminution, Intensification, Attenuation の4つに分けている。GDR では Kajitani (2005) の Augmentation は pluralization に、Diminution と Attenuation は diminution に、Intensification は intensification に相当する。

⁷言語形式に限らず、文字にもこの類像性は生かされている。例えば、筆者の研究するエジプト語のヒエログリフにおける $\overline{\text{mn}}$ 「名前 (単数形)」に対する $\overline{\text{mnw}}$ 「名前 (複数形)」など。

⁸例えば、*papa* を文法的重複語として考えて語基を *pa* と考えても意味をなさない。

⁹ソシュールの思想におけるシニフィアンに対するシニフィエとここでは同義である。

参考文献

- Bybee, Joan. 2001. *Phonology and language use*, volume 94 of *Cambridge Studies in Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William. 2003. *Typology and universals*. London: Cambridge University Press, 2 edition.
- Fischer, Olga. 2011. Cognitive iconic grounding of reduplication in language. In *Semblance and signification*, ed. Pascal Michelucci, Olga Fischer, and Christiana Ljungberg, 55–81. Amsterdam: Benjamins.
- Gil, David. 2005. From repetition to reduplication in riau indonesian. In *Studies on reduplication*, ed. Bernhard Hurch, 31–64. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Haspelmath, Martin. 2008. Frequency vs. iconicity in explainig grammatical asymmetries. *Cognitive Linguistics* 19:1–33.
- van Huyssteen, Gerhard B. 2004. Motivating the composition of afrikaans reduplications: a cognitive grammar analysis. In *Studies in linguistic motivation*, ed. Günter Radden and Klaus-Uwe Panther, 269–292. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Inkelas, Sharon, and Cheryl Zoll. 2005. *Reduplication: Doubling in morphology*. Cambridge Studies in Linguistics. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jagersma, Abraham Hendrik. 2010. A descriptive grammar of sumerian. Doctoral Dissertation, Faculty of the Humanities, Leiden University.
- Kajitani, Motomi. 2005. Semantic properties of reduplication among the world's languages. In *Lso working papers in linguistics*, ed. Rebecca Shields, volume 5, 93–106. Milwaukee: University of Wisconsin-Madison.
- Kulikov, Leonid. 2005. Reduplication in the vedic verb: Indo-european inheritance, analogy and iconicity. In *Studies on reduplication*, ed. Bernhard Hurch. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, George, and Mark Johnson. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- Moravcsik, Edith A. 1978. Reduplicative constructions. In *Universals of human language*, ed. Joseph H. Greenberg, volume 3, 297–334. Stanford: Stanford University Press.
- Nomura, Masuhiro, and Setsuko Kiyomi. 1993. How to motivate the meaning of verbal reduplication: Cognitive and typological perspectives. Handout at Berkeley/UCSD cognitive linguistics workshop, University of California, San Diego.
- Rau, D. Victoria, and Maa-Neu Dong. 2005. Yami reduplication. *Concentric: Studies in Linguistics* 31:57–87.
- Regier, Terry. 1998. Reduplication and the arbitrariness of the sign. In *Proceedings of the Twentieth Annual Conference of the Cognitive Science Society*, ed. M. Gernsbacher and S. Derry, 887–892. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Rubino, Carl. 2011. Reduplication. In *The world atlas of language structure online*, ed. Matthew S. Dryer and Martin Haspelmath, chapter 27. Munich: Max Planck Digital Library. Available online at <http://wals.info/chapter/27> Accessed on 2013-09-11.
- Sapir, Edward. 1921. *Language: An introduction to the study of speech*. New York: Harcourt, Brace and company.
- Steriade, Donca. 1988. Reduplication and syllabic transfer in sanskrit and elsewhere. *Phonology* 5:73–155.

Linguistic Motivation in Reduplicated Words: from Typological Perspectives

So Miyagawa

Kyoto University

This study aims to reveal linguistic motivation and semantic map of different functions of morphological reduplication in the world's languages from the typological standpoint.

The author used the Graz Database on Reduplication (GDR) to survey how many types of functions of reduplication one language. The GDR categorizes functions of reduplication into six types, i.e., diminution, intensification, pluralization, word-class derivation, lexical enrichment, and others. The GDR has a vast amount of data on the reduplication of 82 languages, which have morphological reduplication.

Results of this study show that majority of the languages (87%) have a reduplication of pluralization and that pluralization is the prototypical function of reduplication. The conclusion is also supported by the strong iconicity between its form and meaning and the iconicity of quantity. The author tried to reveal the linguistic motivation of other functions, especially diminution, by comparing works in the existing literature.

Section 1 shows that reduplication is a morphological device and that the forms and functions in reduplication are diverse. Section 2 discusses the research methodology, and Section 3 describes the results and reveals the prototypicality of pluralization in the function of reduplication. Section 4 presents the linguistic motivation of other functions by comparing previous studies, and Section 5 describes the link between grammatical and onomatopoeic reduplication. Finally, Section 6 presents the semantic map of reduplication.